二〇二五年度
第三回　入学試験問題

国　語（五十分）（全十ページ）

〈注意〉

一．試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
二．試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
三．試験開始後、問題冊子がそろっていない、印刷がはっきりしないなどの不備があったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
四．解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
五．記述問題で字数制限がある場合は、句読点など記号も一字として数えなさい。
六．問題文は上下二段になっています。

東京純心女子中学校

一 ――線部のカタカナを漢字に直しなさい。

(1) 今年の夏はヤけるような暑さだった。

(2) 試合時間をエンチョウする。

(3) 勇気をフルい起こす。

(4) 今年の寒さにはヘイコウした。

(5) 現在、会社はコンナンな状況に直面している。

二 次の〰〰線部が直接かかる言葉を、――線ア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

(1) 私は ア小銭の イひやりとした ウ感じが エ好きだ。

(2) ア友だちと 一緒に イ買い物へ ウ出かけるのが エ好きです。

(3) おばたちと ア一緒に イ大好きな ウ水族館へ エ出かけた。

(4) 昨日 ア家族と イ話題の ウ映画を エ見に行きました。

(5) ア彼は 学校の イ友だちと ウいつも エ遊んでいます。

三 次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

佐々木 優希 と 荻野 誠 は、転入生の 米倉 愛 の話を 川原 で聞いている。

優希は愛の話を聞いているあいだ、ときおり 涙 が出そうになった。でも、愛の話を 邪魔 したくないし、自分が泣くのは 違 う。

①ただまっすぐ川の流れを見つめ、心をなだめ落ち着かせ、じっと聞き入った。

自らの 探究 心や意欲を、根こそぎ折られた小学生のころ――。

周り に迎合しなければと必死になり、神経をすり減らし た 明星 女学院のころ――。

際 だった才能を持ったギフテッドだったがゆえに、愛が余計に背負ってきた 孤独 感を思うと、胸 が 締 めつけられる。

愛は一度深呼吸をすると、続けた。

「さっきも言ったけど、みんな違ってみんないい、はずなのにね。学校って校則みたいに目に見えるルールよりも、同調圧力みたいに目に見えないルールの方が、意外とaやっかいだったりするかも」

「同、調、圧、力」

誠が区切りながら 復唱 した。優希が大きくうなずく。

「それぞれ違うことを考えていたり、思っていたりするはずなのに、みんな意見を言わないよね」

愛は背中をベンチの背もたれにあずけ、続けた。
「こう言ったら、あの人になんて思われるかとか、嫌われないかと心配ばかり。ま、自分がそうだったから分かるんだけど。本当は、三十五通りの心があるはずなのに」[*3]
②愛の言葉は、優希の痛いところをぷすりと突いた。
人にどう思われるか、いつも先回りして考えてしまう自分の心を、見透かされているみたいだった。
「同調圧力があったとしても、思ったことを、感じたことを、ちゃんと言うことが大切なんだね」
優希は胸に両手を重ねて、自分自身に言い含めた。
「透明なルールってさ」
「透明な、ルール？」
愛の言葉をなぞった。新たなワードが、心の中をすっと切り開いた。何かをつかめそうな予感がする。
「ああ、同調圧力とかの、目に見えないルール。同調圧力は確かにあるんだけど……」
愛はそこで切って、考えるように首を傾けた。
あるんだけど……？
優希はじっと、その続きを待った。
「透明なルールって、同調圧力だけじゃない、って今になって思うんだ」
「どういうこと？」
思わず前のめりになってしまい、あわてて愛から体を離す。
「明星女学院のときに、日本ジュニア数学オリンピックを勧められたとき、目立ちたくないから、わたしは頑なに断ったでしょ」
「うん」
「でもあれって、みんなの反応を勝手に決めつけていたのかも知れない。透明なルールで、自分で自分を縛っていたんじゃないかなって」
「ごめん、よく分からない」
「あのとき、もし、ジュニア数学オリンピックに出ようとしたら、マーヤ[*4]たちはひょっとして、いっしょに喜んでくれたり、応援してくれたりしたんじゃないかなって」
「それはありだよ」
誠が［③］を打った。
「だからね、あのとき、同調圧力なんて本当はなかったかも知れない。自分が自分に作ってしまう、透明なルールに、縛られていただけかも」
――自分が自分に作ってしまう、透明なルール
④気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた。
愛が帰ったあとも、優希と誠はしばらくベンチに座っていた。
「この風景、なんか新鮮だなぁ」

誠が声をもらした。見慣れているはずの風景の、何が新鮮なんだか不思議だ。

「え、なんで？」

優希は誠の顔をのぞいた。

「僕の家はこっち側だけど、橋をわたるとたいていは、そのままっすぐ家に帰っちゃうんだよね。だから川を眺めるときって、いつもなぜかあっち側からなんだよね」

「うんうん、荻野くんのお気に入りスポット、あっちだもんね」

優希が向こう岸に目線を向けた。

「だから、川は左から右に流れていたんだ。こっちから見ると、右から左に流れてる。あ、⑤そんなのあたりまえか。自分で言ってて馬鹿みたい」

誠が自分の頭をわしづかみにすると、優希は首を横に振った。

「違うよ。あたりまえすぎて、誰も気にも留めないことを新鮮だと感じる、荻野くんの感性が素敵なんだよ」

「いや、そんな……」

⑥誠はもじもじしている。

優希は川の流れを眺めた。

川は右から左に流れている。同じ川でも向こう側から見れば、左から右に流れている。

もし川の中に立っていたとしたら、左右なんか関係なくて、川上を向けば川の流れに逆らうし、川下を向けば流れに押される。

川は変わらず静かに流れているだけなのに。

太陽が下流の方の住宅街の中に姿を落とした。住宅のでこぼことした影が、シルエットのように浮かびあがった。ひんやりとした風が、ふたりのうなじをなでていく。

「さ、そろそろ帰ろっか」

誠がベンチからbおもむろに腰を上げた。

「そうだね」

優希も立ち上がった。

「あっ、忘れてた」

誠が声を上げた。また何か忘れ物でもしたのかと、優希は誠に目線を滑らせた。

「体育祭のスローガン！」

誠の言葉に、両手で頬を押さえた。

「どうしよう」

誠が首をかくんと横に倒す。

「荻野くん、もう時間もないし、家でそれぞれ考えることにしよっか。わたし、自分の考えをちゃんとみんなの前で言えるように、メモってくるよ」

優希はあごをくっと引いた。

「了解。メモ、いいかもね。僕も考える」

誠も力強くうなずいた。

（佐藤いつ子『透明なルール』より）

＊1　迎合……自分の考えを曲げてでも、他人の気に入るように調子を合わせること。

＊2　明星女学院……愛が公立中学校に転入する前に通っていた、偏差値七十を超える中高一貫校。愛は入学試験の数学で満点をとり、数学の先生から日本ジュニア数学オリンピックの出場をすすめられるなど、才能を期待されていたが、周りの友達との「協調性」を重んじ、目立たないように学校生活を送っていた。

＊3　三十五通りの心……学級委員である優希と誠がクラスで体育祭のスローガンを決めていた時、普段（ふだん）は教室で授業を受けていない愛が偶然（ぐうぜん）忘れ物を取りにやってきて、「『心ひとつに』なんて大嘘（おおうそ）だよ」「三十五人いれば、三十五通りの心があるんだから」と発言したことを踏（ふ）まえている。

＊4　マーヤたち……明星女学院で愛が所属していたグループの生徒たち。小学校時代の先生から「協調性がない」と言われたため、中学校では協調性を重んじてグループに所属し、「日本ジュニア数学オリンピックに出る」といった目立つことは避（さ）け、みんなに合わせるようにしていた。

問一　═══線a「やっかい」・b「おもむろに」の言葉の意味として適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

a「やっかい」

ア　重要になること。　　イ　めんどうなこと。

ウ　後回しにすること。　　エ　無関心であること。

b「おもむろに」

ア　意を決して思い切った様子。　　イ　堂々（どうどう）としている様子。

ウ　ゆっくりしている様子。　　エ　自信がない様子。

問二　═══線①「ただまっすぐ川の流れを見つめ、心をなだめ落ち着かせ、じっと聞き入った」から読み取れる優希の心情として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　愛の話には理解できない部分が多かったが、聞きたいことは愛の話が終わってから聞くのがマナーだと思い、一点を見ることで自分の混乱をおさえ、愛の話の続きを聞こうとしている。

イ　愛の話には身につまされる部分があり、心が高ぶっていたが、最後まで愛の話を聞きたい、聞かなければならないと思い、一点を見ることで気持ちをおさえ、愛の話に集中しようとしている。

ウ　愛の話に出てきた、理不尽なことをし続けた周囲の人々への怒りで心がふるえたが、今の自分にできることは何もないという無力感にさいなまれ、一点を見ることで現実から逃げようとしている。

エ　愛の話の内容は、過去の自分を思い出させるものでたえられなかったが、現実を乗り越えなければならないのは自分ではなく愛であるから、今は愛の話に耳を傾（かたむ）け、時間が過ぎるのを待とうとしている。

問三　═══線②「愛の言葉は、優希の痛いところをぷすりと突いた」とあり

ますが、優希がこのように感じたのはどうしてですか。本文中の言葉を使って、解答欄に合うように、五十字以内で説明しなさい。

愛の言葉は【　五十字以内　】から。

問四　「同意を示す」という意味になるように、③に入る言葉として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　太鼓判　　イ　舌つづみ　　ウ　相づち　　エ　ピリオド

問五　――線④「気付いたら、優希は少しの間、息を止めていた」について、あとの各問に答えなさい。

(1)　ここから読み取れる優希の様子として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　「透明なルール」は、同調圧力だけでなく、相手の考えや反応を自分で決めつけることでもある、という新しい考え方に驚いている。

イ　「透明なルール」は、自分で自分の生き方を苦しくするものすべてを含んでいるのだという指摘に、動揺を隠せないでいる。

ウ　「透明なルール」は、あると思いこんでいるだけで、本当は存在しないものである、という予想外の展開に混乱している。

エ　「透明なルール」は、思ったことや感じたことをいうだけではなくならないという主張に、これまでの自分の安易な考え方を反省している。

(2)　ここと同じように、「透明なルール」について、優希が愛の話に引き込まれていることが読み取れる一文を本文中から探し、はじめの五字を抜き出しなさい。

問六　――線⑤「そんなの」が指し示す内容を、四十字以内で説明しなさい。

問七　――線⑥「誠はもじもじしている」とありますが、それはなぜですか。「～から。」に続くように、誠の心情を四十字以内で説明しなさい。

問八　本文の読後感を語ったものとして適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　愛と語り合う中で「透明なルール」という新しい考え方を知った優希と誠が、それまでの自分に別れを告げて新たな一歩を踏み出そうとしている様子が、最後の情景描写から伝わってくるね。太陽が沈む描写は古い自分と別れを告げている部分で、でこぼこした影というのは、優希と誠が別々の道を歩もうとしていることを表しているんじゃないかな。

イ　最後の川の流れを二人が語り合う描写は、「透明なルール」とつながっているように感じたよ。川の流れる方向を決めているのは、自分の「こうあるはずだ」という見方なんだろうな。自分を縛っている見方・考え方をほどくと、気づかなかったことに気づけるし、自由に、自分らしく生きられる、ということなんだと思うよ。

ウ　愛の「透明なルールで他人を縛っていた」という話を受けて、優希と誠が、自分も他の人に透明なルールを押しつけているのではないかと反省している最後の場面が印象的だったよ。自分が何気なくしていた行動が、相手を傷つけていることがあるかもしれないから、定期的に友達に意見を聞いてみる必要があるよね。

エ「透明なルール」から解き放たれた優希と誠は、体育祭のスローガンについても前向きに話をすすめようとしているね。愛が言うように、物事には計画性なんて必要なくて、あるがままの状態を受け入れる柔軟（じゅうなん）な心が一番大切だから、思い立ったらすぐに行動に移そうとしている優希と誠のクラスでの話し合いは、きっとうまくいくと思うな。

四 作家の 小手鞠(こでまり) るいさんが、読者の質問に回答した次の文章を読んで、あとの各問に答えなさい。

……こんにちは。わたしは読書も大好きだし、文章を書くのも、わりと好きなほう。でも、自分の書いた文章をあとで読み返してみると、いつも必ず自己嫌悪(じこけんお)におちいります。なんというか、ただ、だらだらと、うだうだと、どうでもいいようなことを書いているように見えちゃいます。どうすればもっと、すっきりした文章が書けるのでしょうか。書く前に、意見はちゃんとあったはずなのに、書いているうちに、自分でも自分の意見がわからなくなってくることも多いです。小論文の 成績(せいせき) もいつも「優・良・可」の「可」止まりで情けないです。(涙(なみだ))。①決められた枚数の中で、言いたいことをすっきり書ける方法を教えてください。

都内の私立女子大生十九歳(さい)

十九歳の私立女子大生さん、質問のメールをくださって、ありがとう。「だらだら、うだうだ」を「すっきり」に変えたい。「決められた枚数の中で、言いたことをすっきり」書きたい。了解(りょうかい) しました。

本日のメインテーマは、文章の効果的なダイエット方法について、ですね。

まず、私が小説を書く前に、いつもやっていることについて、お話ししましょう。

短編(たんぺん) 小説を書くときにも、長編小説を書くときにも、同じことをしています。

I

家を建てるために、建築家が作成する設計図のようなものです。たとえば、敷地(しきち) はどれくらいで、何階建ての家で、間取りはどうなっていて、窓やドアはどこについているか、ガレージはあるか、庭はどこにどれくらいあるか、などなどが、図面に 描(か) かれているのが設計図ですね。サイズを示す細かい数字も書きこまれています。

私は図面ではなくて、a で設計図を描きます。

この小説の時代は? 舞台(ぶたい) は? 登場人物は? 主人公は? 何歳(さい) くらい? 性格は? 性別は? 家族は? 仕事は? どんな事件が起こる? 作品の 冒頭(ぼうとう) はどう始める? 結末はどうなる? 文体は? 常体(である・だ)か、敬体(です・ます)か。何枚くらいの作品にする? 章は何章くらい? タイトルは?

こういったことがらを、思いつくまま、断片的に、順番も気にしないで、どんどんノートに書き出していきます。とにかくどんどん書き出していくうちに、ばらばらだったイメージが、少しずつですが、ひとつにまとまり始めてきます。漠然(ばくぜん) とではありますが、小説が遠くにぼんやり見えてくる、という感じになってきます。

②そうなったら、しめたものです。

つぎは、そこへ向かって歩いていくための地図をつくればいいのです。

地図とはあらすじのことです。

プロットとも呼ばれていますね。

あらすじを漢字で書くと「粗筋（あらすじ）＝粗っぽい道すじ」。

Ⅱ

すじ道をつけて書く、ということはすなわち、論理的に書く、ということでもあります。

論理的に書く。このフレーズ[*1]、今までにも何度も出てきましたね。この文章教室の重要なキーワードです。論理的に書かれている文章は、非常にすっきりしています。これこそ、あなたの願いを満たした文章ですね。

Ⅲ

もっともかんたんなあらすじの組み立て方は、ずばり③「起・承・転・結」です。

始まりの章があり、その流れに乗って、その流れを承（う）けてつづいていく章があり、流れが大きく変わる章があり、結末の章がある。

いたってオーソドックスな地図です。オーソドックスですが、とても頼（たよ）りになります。私もいつも頼りにしています。

Ⅳ

それを読み返しながら、「起・承・転・結」の四つのパートに分けてみてください。

どこかが、あまりにも長すぎたり、短すぎたりしていませんか？

四つのパートが入り乱れたり、前後したりして、ごちゃごちゃになっていませんか？

「結」が欠けてはいませんか？

④そんなふうに検討しながら読み直してみると、どこをどのように整理すれば、あるいは刈（か）りこめば、よりよくなるのか、すっきりさせられるのか、ダイエットするべき場所がわかってくるはずです。

今度、論文を書くときには、書く前に、設計図と地図を用意してみてください。

用意した上で、自分の書いた文章が、それまでとはどう変わってきたか、くらべてみてください。きっと、ずいぶんすっきりしていることでしょう。

（中略）

さて、あなたのダイエットは、成功したでしょうか？

「書く前に、意見はちゃんとあったはずなのに、書いているうちに、自分でも自分の意見がわからなくなってくることも多い」と、あなたは書いていましたが、もしもダイエットが成功したなら、おそらく、それとは正反対のことが起こったはずです。

つまりあなたは、あなたの書いた文章を読んで改めて、自分の意見をより明快に理解し、「そうか、わたしってこんなことを考えていたのか」と、自分自身をより深く理解することができているのではないでしょうか。

⑤実は、それこそが、文章を書くということの醍醐味（だいごみ）であり、私が書くことに取りつかれている大きな理由のひとつでもあります。

村上春樹さんは『スプートニクの恋人』の中で、登場人物のすみれに、こんなことを語らせています。

（中略）

何かわからないことがあると、わたしは足もとに散らばっている言葉をひとつひとつ拾いあげ、文章のかたちに並べてみる。もしその文章が役に立たなければ、もう一度ばらばらにして、またべつのかたちに並べ替えてみる。そんなことを何度か繰り返して、ようやくわたしは人並みにものを考えることができた。文章を書くことは、わたしにとってはそんなに面倒でも苦痛でもなかった。ほかの子供たちが美しい小石やどんぐりを拾うのと同じように、わたしは夢中になって文章を書いた。わたしは息をするようにごく自然に、紙と鉛筆を使って次からつぎへと文章を書いた。そして考えた。

この文章を読んだとき、私は、ここに出てくる「わたし」はそのまま私＝小手鞠るいではないかと思いました。

もしかしたらあなたも、そう思ったのではありませんか？

個人的な意見が書かれていても、その個人的な意見が普遍的な力を持つ、というのはこういうことなのです。一文一文に根が生えていて、すべてのことばに生命が宿っているからです。強い木が集まって、美しい森をつくっているのです。

書くことは考えることだ、と、これまでにも何度か、私は書いてきました。

でも、考えることは書くこと、でもあるのですね。

すじ道を立てて論理的に書くためには、論理的に考える必要がある。と同時に、論理的に書いていけば、論理的にものごとを考えることができる、ということなのです。

⑥ことばとは、文章とは、なんてすばらしいものなのだろう、と、私は思います。

（小手鞠るい『放課後の文章教室』より。なお本文には省略等があります）

＊1 フレーズ……言いまわし・表現。

問一 ――線①「決められた枚数の中で、言いたいことをすっきり書ける方法」についてあとの各問に答えなさい。

(1) 「言いたいことをすっきり書ける方法」とありますが、この内容を本文中から十五字以内の比ゆで抜き出しなさい。

(2) 「言いたいことをすっきり」書くとは、どのように書くことですか。次の空欄に入る言葉を本文中から六字で抜き出しなさい。

【　六字　】ということ。

問二 本文中の Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ に入る言葉として適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　では、どんなふうにして、あらすじを組み立てたらいいのか。
イ　それは、小説の設計図をつくる、ということです。
ウ　ところで、あなたの手もとには、すでに書かれている小論文がありますね。
エ　つまり、あらすじをつくる、ということは、小説なり論文なりに「すじ道をつける」ということ。

問三　a に入る適切な言葉を、ひらがな三字で答えなさい。

問四　――線②「そうなったら、しめたものです」とありますが、なぜこのように言うのですか。本文中の言葉を使って六十字以内で説明しなさい。

問五　――線③「起・承・転・結」とありますが、これに基づいて書かれた文章をたとえた表現を、本文中から十字で抜き出しなさい。

問六　――線④「そんなふうに検討しながら読み直してみる」とありますが、どのようにしながら読み直すことを筆者はすすめていますか。本文中の言葉を使って、解答欄に合うように、五十字以内で具体的に説明しなさい。

【　五十字以内　】こと。

問七　――線⑤「実は～大きな理由のひとつでもあります」とありますが、筆者は文章を書くことにとりつかれている大きな理由の一つにどのようなことをあげていますか。本文中から十五字で抜き出しなさい。

問八　――線⑥「ことばとは、文章とは、なんてすばらしいものなのだろう、と、私は思います」とありますが、これについて会話した次の【1】～【5】に入る言葉を、本文中からそれぞれ指定の字数で抜き出しなさい。

A美　筆者は、どうすれば文章がうまく書けるようになるか、女子大生にていねいに回答してるね。特に最後の方で引用している『スプートニクの恋人』の「すみれ」の言葉、私も共感したなあ。
B枝　うん。すみれと同じように、筆者にとっても文章を書くということは、【1　六字　】ことなんだね。
A美　そのために、【2　九字　】を選び取ること、そして、それを【3　六字　】に何度も【4　七字　】ことが大事なんだね。
B枝　「一文一文に根が生えていて、すべてのことばに生命が宿」るっていう筆者の言葉にも、すてきな比ゆが使われているね。
A美　私もことばを大切にして【5　三字　】な力を持つ文章を書きたいな。